

ワークショップ型授業の試みと授業コンサルティングサービス

榎林 建司, 佐藤 浩章

Workshop-Based Teaching and Teaching Consulting Service

Takeshi NARABAYASHI, Hiroaki SATO

1. はじめに

大学教育についてFD（ファカルティ・ディベロップメント）という言葉が定着して、もう数年になるだろう。FDとは、広い意味では、大学全体の教育能力強化（課外活動に対する支援も含む）に向けた活動をさし、狭い意味では、個々の授業をよりよいものにするための活動をさす。いずれの場合も、教員一人ひとりの努力だけでなく、大学や学部といった組織的な取り組みや協力体制が重要視されることは、もはや常識の範囲に属する。

愛媛大学においては、教育開発センター（以下、センター）が核となって、FDの推進を図ってきた。センターは、これまでに、各種のセミナー、シンポジウム、ワークショップを実施してきている。また、平成16年度には、共通教育カリキュラムの改善に向けた活動の一環として、教養教育における数種の新機軸科目を試験的に導入している。

榎林は、法文学部に所属する教員であり、これまでにFDに関するワークショップやセミナーに何度か参加している。本稿で取り上げる「難民問題についてのワークショップ」（平成16年度前学期実施）も、新機軸科目の一形態である「主題別セミナー」に分類される。

佐藤は、センターに所属する教員であり、榎林の授業の実施に当たり、他のセンター教員とともに授業コンサルティングサービスを提供した。こうしたことから、当該授業とサービスを、本学におけるFDの1つの到達点を示す事例と性格づけることも、許されるだろう。

本稿においては、当該授業につき、授業実施者（榎

林）による授業改善の試みという視点からふりかえるとともに、授業実施者に対するセンター教員（佐藤ら）の授業コンサルティングサービスを分析して、本学におけるFD活動の現状の一側面を明らかにしたい。以下、1・2を榎林が、3・4を佐藤が執筆担当した。

2. 授業の構想と実際

(1) 授業の構想

平成13年度～15年度の3年間、榎林が行ってきた共通教育の授業は、新聞等の資料を手助けにしつつ、国連のホームページに掲載されたニュース（英文）を読んでいくというものである。主たるねらいは、時事的な国際問題に対する関心を持ってもらうこと、および、新聞の比べ読み等により、複眼的なものの見方を身につけてもらうことであった。また、副次的には、学生が英語を読む機会を増やすということも、ねらいとしていた。

こうした授業のやり方でも、学生による授業評価アンケートの結果は、平均を多少は上回っていた。また、最終レポート等を読んでも、平均して、60名程度の受講生のうち2～3名の学生は、授業を契機にして、かなり前向きに高いレベルの自学自習に取り組んでいることが伝わってきた。

しかしながら、授業実施者として、授業に対する全体的な参加意識をより盛り上げ、受講生が自ら学ぶ姿勢をより育むことにつき、かなりの行き詰まりを感じていた。行き詰まりの理由としては、授業が一方通行の講義形式をとっていたこと、国際問題を

身近に感じることができない受講生が少なくないこと、受講生の英語力にかなりのばらつきがあること等が考えられた。

そこで、平成16年度の授業を構想するに当たり、これを「主題別セミナー」（定員は36人に設定）の1つとして位置づけ、相互に関連する次の3点につき大きな改革をすることにした。

第1は、難民問題を題材としつつ、他者との関わり方の基本を身につけるということを授業の目的として設定したことである。難民のニーズを把握し具体的に何をなすべきか、また自分は何ができるのかを考えていくことに力点を置くことにした。広い意味での人間関係の形成方法ということなら、受講生の専門に関係なく関心と呼ぶことができるだろうし、また、人間関係の形成がうまく行かない学生が少なくないという実態を見て、そういったことが必要だと判断したからである。

(表) シラバスの骨子

* 授業の目的
難民問題を題材として、「弱者」とされる人々と主体的に関わるために必要な基本的素養を身につける。
* 授業の内容・スケジュール
1 ガイダンス
2 ウォーミングアップ
3 難民について見る・聞く
4 難民に関する基礎知識
5 難民問題に対する国際社会の取り組み
6 緒方貞子氏の活動
7 日本の難民受け入れ体制
8 デイバート準備
9 デイバート
10 子どもである難民の教育面におけるニーズの把握
11 子どもである難民向けの教育プログラムの骨子立案
12 子どもである難民向けの教育プログラムの発表準備
13 子どもである難民向けの教育プログラムの発表(1)
14 子どもである難民向けの教育プログラムの発表(2)
15 まとめ

第2は、一方通行の講義形式に代えて、ワークショップという形式を全面的に取り入れ、6人程度のグループにおける学び合いを授業手法の軸に据えたことである。これは、授業実施者自身の経験から、ワークショップが、参加意識と自主性を育むうえで非常に有益な手法であることを実感していたからである。

第3は、授業の各段階において、多くの人の助力を得ることである。

まず、シラバスの作成につき、原案を授業実施者が作ったうえで、センター教員との意見交換に基づく修正を重ねるという形で進めていった。こうした作業により、15回の授業の構成が、1人で作成する場合と比べ、無理が少なくつながりのよいものとなった。できあがったシラバスの骨子は、左下の表の通りである。

ついで、全ての授業時間につき、全学の教職員の参観を歓迎することを、センター発行の広報誌等で公にした。ワークショップ形式の授業は、授業実施者にとって初めての経験であり、これをうまく実施していくためには、他者からのきめ細かいアドバイスが必要であると判断したからである。

さらに、資料配付補助のためや討論の促進役として、あるいは自分の体験談を話してもらうため、上回生や院生に登場してもらうことにした。受講生が授業をより身近に感じること、授業実施者にはない知識や体験を伝えてもらうことを、効果として期待したのである。

(2) 授業の実際

① 授業の展開

シラバス作成段階での苦労が実り、ほぼシラバス通りの授業を進めることができ、全体として一応まとまりのある授業となった。また、各回の授業の冒頭に、その日に行う内容をレジюмеにして配り、レクチャーとグループ作業の関係を示し、それぞれにどの程度の時間をとる予定であるかを明示しておいた。

なお、次の2点については、受講生に事前に説明したうえで、シラバスに若干の修正を施した。

(1)第6回の授業は、当初、「緒方貞子氏の活動から何を学ぶか?」というテーマを予定していたが、それでは、グループ毎の発表内容が大同小異になるであろうと気づいた。そこで、第5回の授業内容や緒方氏の活動についての簡単な説明をふまえ、「国

連難民高等弁務官事務所（UNHCR）への協力強化を、日本の国益増進という観点を含めて、日本政府に依頼する書簡案を作る」というテーマにしたのである。こうすることにより、各グループから、様々なもの見方をより引き出すことができたと考えられる。

(2)第7回の授業は、当初、第8回と第9回で行うディベートのテーマと関連づけてはいなかったが、それを関連づけることにした。こうした関連づけにより、各回の授業間のつながりがより密接になり、第7回におけるレクチャーを受講生がより前向きに聴く効果があったと推測される。

上記2点以外、授業はシラバス通りに進んだものの、授業の構成という観点から、いくつかの反省点は残る。

主なものをあげると、1つは、第3回の授業が盛りだくさんになりすぎたことである。この時間では、難民問題に関するごく基礎的な知識を○×形式のクイズで取得させることと、難民と震災被害者の写真を比べて、両者の状況の共通点と相違点を考えさせることを行った。授業実施者としては、「あれもこれも」という思いや「学生の沈黙がこわい」という思いがあつてのことであるが、1回の授業に2つのテーマを取り扱ったことにより、各テーマについての学習が、時間に追われて消化不良になってしまった。

もう1つは、第13回と第14回の授業に行ったグループ毎の「教育プログラムの発表」において、寸劇形式の模擬授業を入れさせたことに関するものである。授業実施者としては、各グループが最も大切に考える理念を、具体的な授業の1場面という形で発表させることをねらっていた。しかし、教職免許取得をめざす上回生ではない受講生にとって、かなり難しい課題だったようである。実際、ごくありきたりの授業風景の演技に終始してしまうグループや、やや「ウケねらい」のパフォーマンスに走るグループもあり、模擬授業の試み自体は、実施者が期待していたほどは、深まりあるものとはならなかった。

② 参加意識の高揚に向けた工夫

ワークショップ形式という授業の性格上、授業の成否のカギとなるのは、グループ作業を始めとする授業への参加意識である。

この点につき、授業実施者は、初対面の者同士(教

員と受講生、受講生相互)にある緊張感を解きほぐし、教員を含む全ての授業参加者の間に気楽な意思疎通が可能となるよう心がけた。主な工夫としては、次の6つが挙げられる。

1つめは、「世界にひとつだけの花」を授業のテーマソングに設定して、毎回の授業の初めに歌ったことである。これについては、必ずしも乗り気でない受講生もいたが、受講生の頭と心をほぐし、教員との距離感を縮めることには有益であった。もっとも、毎回というのはやや過剰だったようでもあり、今後の検討課題となる。

2つめは、ウォーミングアップのために1回の授業を費やすなど、アイスブレイキングを重要視したことである。第1回の授業で、次の時間に自己紹介をしてもらう旨を予告し、第2回の授業で1人30秒の自己紹介をしてもらった。実施者は、できるだけユーモアを交えながら、各自の自己紹介に対し肯定的にコメントした。

3つめは、第2回の授業で、「どんな意見も歓迎される」等のワークショップの「鉄則」を提示したことをはじめ、意見が出やすい雰囲気を作り出すよう心がけたことである。受講生には、とにかく「よい意見を言わなければならない」という思い込みが見られるが、陳腐なものでも荒唐無稽なものでも、とりあえずはアイデアを出してみることが出発点になるということを強調した。

4つめは、実施者が設定したテーマについて、議論がはかどっていないように見えるグループに対して、「議論が進みにくいのは、授業実施者と受講生の間に問題意識等の溝があるからで、その溝を協力して埋めよう」という立場から介入したことである。これにより、受講生側からも、テーマや議論の進め方につき、次第に積極的に質問が出るようになった。

5つめは、ミニミニレポートを頻繁に提出してもらい、次回の授業で少しの時間をとり、その内容につきコメントしたことである。これによって、授業実施者のフィルターを通してではあるが、授業における発見、授業に対する感想や注文等につき、賛否はともかく認識を広く共有することができた。

6つめは、「中間アンケート」の代わりに「ミッドターム・スチューデント・フィードバック」を実施したことである。この手法については「3」で詳述するが、授業実施者のフィルターを通さない形

で、授業に対する様々な意見を、グループ毎にまた受講生全体で共有することができ、参加意識の高揚という観点からも、たいへん効果的であったと評価される。

③ 授業実施者から見たセンター教員による授業コンサルティングサービス

センター教員が、第3, 4, 7, 10, 14回の授業を参観した。第14回の授業は2名による参観で、その他は1名による参観である。これ以外にも、第5回には、「ミッドターム・スチューデント・フィードバック」(後述)のためセンター教員が入り、第10回の授業は、ビデオ撮影担当の事務職員も参観した。

参観した教員からのアドバイスにより、授業実施者は、自分だけではなかなか意識しにくかった「良かった点」と「改善すべき点」について、および、レクチャー時やグループ作業時の学生の様子について、多くの気づきを与えられた。

特に即効性があったアドバイスとしては、話し方の癖、座席の配置、ノートのとらせ方、板書の仕方、ミニミニレポートの用紙を配るタイミングなどに関するヒントが挙げられる。授業の初期段階において、少しの心がけで改善できる点を、受け容れやすい形で指摘されたことは、授業実施者にとって大いに有益であった。また、グループ作業における議論の活性化等につき、特効薬的な結論が出ないまでも、参観者と授業実施者間で悩みを共有できたことにも、さらなる改善努力への意欲を強める効果があった。

この他、受講生にとっては、授業実施者以外の教員の目を意識することや、教員集団が授業改善に前向きであるという実感が補強されることにより、責任ある受講態度が促進されたと推測される。また、目的実現に向けた他者との協力のあり方について、1つの実例を示し得たことも、授業のテーマから見て意義あることだった。

④ 最終レポートに見られた学生のコメント

「この授業を通して身についたこと」をテーマにした最終レポートでは、次のような代表的な記述が見られた。

※「人ととのコミュニケーションの取り方というのも、本授業で学んだことの1つである。…円滑な

議論のためには、お互いがリラックスして発言できる環境と、よい人間関係が必要なのだということを見つけた。」

※「私がこの講義で一番学んだことは『助け合うこと』の大切さだと思う。難民の実情を勉強するときにも、グループワークのなかでもそう感じた。」

※「私はこの授業を受ける前までは、グループワークが嫌いだった。なぜならグループ内で取り組みに対する温度差が感じられることが多いし、…何よりも気を遣わなくてはならないからだ。けれども、難民問題を通してグループワークに取り組んで、この自分本位の考えは、難民問題に通じているのではないかと思った。」

※「この授業を受けて、難民についてもっと知りたいと思ったし、自分がこれから何かできるようになりたいと思いました。大きなことでなくてもいいから、小さなことで人の役に立てるようになればいいと思います。そのためには、ただ受身の姿勢ではなく、この授業のように、わからないことにぶつかったら、積極的に人に聞いたり、自分で調べたりする姿勢が大事だと考えます。」

上記の例に表れているように、難民問題に関する知識をまとめたレポートはごく少なく、ワークショップという手法によって身についたことや、身近な人間関係と難民問題の関わりについての気づきに言及したレポートがほとんどであった。難民問題についての知見を深めるという点では、やや不十分であったかも知れないが、受講生の自主性と社会性を伸ばすという点においては、実施者の従来の授業と比べて成功したと評価される。こうした成果は、来年度の授業につきアシスタントをしたいという受講生が、現段階で3名出ていることにも表れている。

3. 授業実施者に対する授業コンサルティングサービス

(1) 授業コンサルティングサービスの意義

FDが日本の大学に導入された1990年代初期段階において、各大学のFDの取り組みは、啓発を目的としていた。著名な学外の教育学者を招聘し、FDの意義や歴史、海外事例などについての講義を受けるという形式であり、「講義型FD」に分類できる。

しかし1990年代半ば以降、北海道大学が先鞭をつけた、授業スキルの向上を目的とし、グループで授業開発、模擬授業を実施する「ワークショップ型FD」¹⁾、あるいは京都大学が先進的に取り組んでいる、複数の参観者による授業参観とその後の検討会によって構成される「公開授業型FD」²⁾などが全国各地の大学で取り込まれるようになり、その形態は多様なものとなった。

今回のFDは「公開授業型FD」に分類される。このタイプのFDは、他のタイプに比較し、日常的であり、個別ニーズに対応できているという点で実践性が高いという特徴がある。しかし京都大学で実施されている「公開実験授業」の取り組みからわかるように、授業実施者と参観者双方に、多大な負荷をかけていることもあり、なかなか多くの教員に広まらないのが実態である。

FDの内容は個々の大学が置かれている状況に依存している³⁾。本学のセンターは、「講義型FD」の機会を徐々に減らし、センターが学内措置で設置された2001年度より「ワークショップ型FD」を開始し、その後プログラムの体系化を進めている。今後は「公開授業型FD」に取り組んでいくべきである。しかし、米国の同機能のセンターのように複数の教育コンサルタントを配置できる環境にない本学においては、より小さな労力と時間で大きな効果をあげるFDが求められている。センターにとって、今回の試みは、「公開授業」と「ミッドターム・スチューデント・フィードバック」を組み合わせることで、本学に適切な授業コンサルティングサービスを模索するものであった。

(2) 授業コンサルティングサービスの実際

① 授業参観

初回の授業において、授業実施者は、学生にセンター教員が授業改善の研究のために教室に入ることを告知した。3人のセンター教員が、第3、4、7、10、14回の授業を別々に参観した。授業終了後に、参観者は必ず電子メールで、授業へのコメントを送付し、それに対し授業実施者は応答した(資料1)。

② ミッドターム・スチューデント・フィードバック

本学の共通教育においては、学期の半ばで中間アンケートを実施することになっている。学生は、後

半の授業において改善できるスキルに限定した項目に答え、授業実施者はそれを参考に後半の授業を再構成することが求められる。しかしこうした記述式アンケートは、①記述が面倒、②書いた内容が教員に届いているか不明確、③成績評価に影響が出るとを恐れるといった理由から、正確に回答されないという限界がある。こうした問題を改善する1つの方策が、ミッドターム・スチューデント・フィードバック(以下、MSF)である。

MSFは、筆者が米国ワシントン大学の教授開発研究センターにおいてFD活動を調査した際に、最も教員からのニーズが高いサービスとして紹介されたものである。中間期に教育コンサルタントと呼ばれるセンタースタッフが教室に入り、ファシリテーター役をつとめて、授業に関するグループワークを実施するものである。今回は米国で実施されているこの試みをほぼ同様の形で実施した。下記が今回実施したプロセスである。

- 1) MSFに入る直前の授業において、次回の授業でセンター教員が入ることを告知する。
- 2) MSFに入る授業の冒頭で、授業実施者がセンター教員を紹介する。利害関係のない第三者であることを学生に伝える。授業実施者は教室から退出する。
- 3) センター教員は、自己紹介をし、これから行う内容を説明する。また出された意見は全て授業実施者に伝えること、その際個人が特定できない形式で伝えることを約束する。
- 4) 学生に、5～6人で1グループになるように伝え、グループ作業ができるように机を並べ替えてもらう。
- 5) まず「教員が自分の学習動機を促進させた言動」と「教員が自分の学習動機を低下させた言動」をそれぞれ赤と青の付箋紙に個人で記入してもらう。後者については改善案を合わせて書くように伝える。
- 6) 書き終わった段階で、グループ内で1人ずつ付箋紙の内容を発表してもらう。
- 7) グループ内で出た意見の概要をグループ毎に発表してもらう。この際、センター教員は内容について評価的コメントをしない。
- 8) 付箋紙を回収し、センター教員は教室を退出する。代わりに授業実施者が入室し、授業

を始める。

- 9) センター教員は、付箋紙をテキスト化する。
- 10) 授業終了後に、センター教員は授業実施者に会い、学生のコメントを手渡す。
- 11) 授業実施者は、次回の授業において、学生のコメントについて必ずコメントをする。

MSF の実施に要した時間は20分程度である。通常の間アンケートと比較して、以下の特徴が見られた。

第1に、記述内容が多かった。全員の学生が記述し、複数の付箋紙にコメントする学生がいた。

第2に、否定的なコメントよりも肯定的なコメントが多かった。授業実施者の特性にもよるが、付箋紙を分けたことにより、肯定的コメントの記入が促進されたと予想される。これは授業実施者の授業改善意欲を高めるのに有効である。

第3に、コメントが具体的であり、改善策が書かれていることが多かった。グループ内での発表を意識してか、授業アンケートに見られる中傷コメントは一切なかった。代わりに代替案を添えた建設的な否定的コメントがあり、これも授業改善に有効であった。

③ 授業検討会

15回全ての授業が終了した段階で、授業実施者とセンター教員で、授業検討会を実施した。参観したセンター教員のコメントに、授業実施者が応答する形で進められた。この場でも、MSF の内容が有効であったとのコメントが授業実施者からあった。

4. おわりに

今回の授業コンサルティングサービスは公開授業とMSFを組み合わせて実施した。授業参観については、原則はセンター教員1名が参観し、授業終了後に授業実施者と電子メールのやりとりを行うという形式であり、少ない参観者でも比較的容易に実施できるものである。参観者が少ない場合、偏った意見が出る可能性があるが、参観する側をトレーニングすることでその可能性を低くすることは可能だろう。電子メールを使用することは、リアルタイムでのやり取りがなくなり臨場感に欠けるが、参観者と授業実施者の時間調整を不要とできる点、文章にすることで冷静にコメントができる点がメリットとしてあげられる。今後は、参観者向けのガイドライン(授業を参観する上でのポイントや建設的なコメント方法など)の開発が求められる。

MSFについては、学生の記述内容ならびにそれを受けとめた授業実施者の改善行動から考え、公開授業と切り離して単独で実施しても効果を発揮するものと思われる。今回は参観者がMSFのファシリテーターを兼ねたが、両方実施する場合は別な人物が担当することで、個人情報漏洩を気にする学生に安心感を与えることができるかもしれない。また、MSFについてもファシリテーター向けマニュアルの開発が必要である。

尚、今回の参観には、佐藤以外に下記のセンター教員が参加した。

松久勝利, 井上敏憲

資料1. 授業実施者と授業参観者のやりとりの記録

■第3回授業終了後 4月28日分(参観者:佐藤)

○授業参観者(佐藤)→授業実施者(植林)

〈良かった点〉

- 学生が真面目に唄を歌っていた。
- 学生がグループワークに積極的に取り組んでいた。
- 教員が積極的な雰囲気を作るよう努力しているのが伝わっていた。
- 教員が笑顔での説明などリラックスする雰囲気を作り出していた。
- 教員が授業改善に前向きに取り組む姿勢を見せて

いた。

- ビデオ参観の際に視聴ポイントを指示し、漠然と見ることを防いでいた。
- 授業全体像の提示、ミニレクチャー、ビデオ、先輩学生の体験談、グループワークといった一連の流れ、使用教材が適切であり、構成が良くされた授業であった。
- 学生の理解が不足する単語について詳細な説明があった。
- 説明のスピードは適切であった。

〈改善するとさらに良くなるであろうと思われる点〉

- 教員のレクチャー時に下を向いている学生が多い。下を向くと注意力が散漫になり、眠気が増す。「こちらに注目してください」などの指示を出し、顔をあげさせるとよい。
- 最初のレクチャー時は、教室の後ろに座っている学生が多かったため、人数が確定しているのであれば、「真ん中2列の前から20行目に座るように」と指示を出し、レクチャー時は、教室の真ん中に固めて座らせると、授業の集中度が高まる。ただしあまりつめすぎると不満が出る。グループワーク時には強制的に振り分けるので、レクチャー時はこれでも良いかもしれない。
- 地図の提示は、OHC（現物投影機）を使用すると、簡単に拡大提示ができる。
- 重要用語を黒板に書き出すなどして、キーワードを強調するとよい。
- 「あの一」が口癖になっており、若干聞きにくい部分がある。

〈その他〉

- 唄を毎回歌わせるのは正直うまくいかなさと思っていましたが、寝ぼけた頭を回転させるという意味でも、おもしろい作業だなと思いました。カラオケを流さないところもあればあれでよいかと思いました。授業というのは不思議なもので、内容についてはほとんど忘れてしまうのですが、毎回唄を歌わせられた授業というのは恐らく一生思い出に残るでしょう。

○授業実施者（植林）→授業参観者（佐藤）

大変お世話になります。特に、佐藤先生には、お忙しいなかを参観に来てくださったうえ、貴重なご意見をくださり、深く感謝申し上げます。ご指摘いただいた点は、よく心に留めておくつもりです。なかでも、口癖につきましても、小生、若干の吃音があり、どうしても普通は「あの一」や「えーと」が多くなるのですが、その点を自覚しておくことで、改善を図りたいと考えています。さすがに、学会報告の時には、こうした口癖はほとんど出ませんので…。授業を手伝いに来てくれていた4回生は、「みんな、歌の声は小さかったけれど、グループ作業は活発でしたね。」との感想を述べていました。

■第4回授業終了後 5月12日分

○授業参観者（佐藤）→授業実施者（植林）

〈良かった点〉

- 話し方が以前に比べて聞き取りやすく改善されていた。
- ミニミニレポートに対する細かなコメントが効果的であった。
- 徹底して暗記してほしい知識として難民クイズを設定したのは良かった。
〈改善するとさらに良くなるであろうと思われる点〉
- 内容が盛りだくさんであった。今回は難民クイズ一本でも良かったのではないかな。
- 難民クイズは○×しか求められていなかったため、グループの中には、多数決で短時間で結論を出したところもあった。それぞれに理由を記入する欄を設けた方が良かったのではないかな。
- レクチャー時の集中力が低下している。一度黒板を向いて座りなおさせる、「黒板を見てください」と指示を出すなどが有効
- グループプレゼン時に、学生たちはミニミニレポートの記述をしており、ほとんど他者の発表を聞いていない。授業の最後にレポート用紙を配布するなどして工夫する必要がある。
- 時間が不足した場合は下記のような部分を削除することで短縮できるのではないかな。
 - 1) グループ発表順のジャンケン→教員が指名する
 - 2) グループ発表のうち、すでに重複しているものは省く
- グループ発表の内容を、黒板にキーワードを記述するなどすると、黒板に集中する。
- 例えば下記のような流れが考えられる。
 - 1) 前回の授業の最後にクイズを配布し、答えを理由とともに考えてくることを宿題とする。
 - 2) 今回の授業で、グループ内で、まず自分の答えを発表させる。
 - 3) その後、グループ内で議論し、グループの結論を出す。
 - 4) 正解を発表する。
 - 5) 個人だけで考えた場合の得点総計平均から、グループ得点を引いたものが改善度となる。皆で知恵を出し合うことの大切さ、議論することの大事さを教える。
 - 6) 最も得点の高かったチーム、改善度が高かったチームに褒章をつけてあげる。
評価に反映させる、教員からのプレゼントなど。

7) 今回のクイズの知識については、数回後の授業でミニテストを実施する、期末テストで再度問うなどして、しつこく暗記させるとよい。

- 震災避難民と難民との違いについては、別の教材として使用する。

〈その他〉

- 学生が議論の作法をあまり知らないようです。これは全学的な問題だとは思いますが。システム開発部では、全学部の学生に呼びかけて、議論の作法や質問の仕方などのスタディスキルを教える講座を企画中です。うまく先生たちの授業を支援できるとよいのですが…。

○授業実施者(植林)→授業参観者(佐藤)

1) たしかに、内容を欲張りすぎた。学生の提出したミニミニレポートでも、クイズと写真比較の双方ともに興味をもってくれたことは窺えるが、特にグループ作業につき「中途半端に終わった」との感想が見られた。こうした感想は、実施者の工夫を促すものであると同時に、学生の向上心の表れであると思われるので、次回の授業の冒頭(MSFの後)で、必ず前向きなコメントしたい。とりあえずは、そのことが、少しでも議論の活性化につながるよう期待したい。

2) クイズの実施方法についてのアドバイスは、「自ら学ぶ力を育む」という観点からも、たいへん参考になる。なお、クイズの内容は、第5回～第7回の授業で反復する予定である。学生は、「難民」に対する関心はかなり深いようである。それに加えて、難民の抱える問題を緩和ないし解決していくためには、難民に対して必ずしも温かくない国際社会の現実を目を向けなければならないことを理解してもらうよう心がけたい。

3) ミニミニレポート用紙を配布する時期や、グループ発表のキーワード板書に関するアドバイスについては、残りの授業につき、そっくりそのまま頂戴したい。

■第6回授業終了後 5月26日

○授業実施者(植林)→参観者なし

- 本日の授業の冒頭で、MSFの学生コメントと教官コメントを配り、若干の説明を致しました。注文していたCDプレーヤーが到着していましたので、早速、「新兵器です!!」と言って使いました。

これまでより、歌声が少しは大きくなっていました。

- 前回に出した宿題に対し、受講生は、文案を考えたり、資料を集めたりして真剣に取り組んでいました。その結果を今日持ち寄って作業をしたことにより、かなり深まりが出たように思います。ミニミニレポートを見ても、学生の満足感は高かったようです。実施者によるまとめを添付いたします。なお、キーワードは各班がつけたものです。
- ミニミニレポートで、他の班の発表に対する感想が、これまでより多くなりました。他の班の発表をきちんと聞くことに、改善が見られたようです。
- 心配していた班については、今日も実施者が相談のために介入しました。今日の介入後、かなり議論が進むようになりました。
- グループ作業の最初に、「国益」という言葉について少し説明いたしました。それでも、なかなか戸惑いが解消しない受講生もいました。「利益があるから援助するというのは、おかしい」という純粋な気持ちが強かったようです。ただ、「援助をしたら、こんないいこともあるよ」という捉え方を示したら、納得してくれました。
- 次回のレクチャーを最小限にすることなどのため、今日も宿題を出しておきました。

■第7回授業終了後 6月2日

○授業参観者(井上)→授業実施者(植林)

授業を見せてくださりありがとうございました。システム開発部の授業コンサルティングということではありましたが、私自身も教員として、参考にさせていただきます。見せていただいた私の方のメリットが大きかったかもしれません。先生の授業に対する姿勢のよかった点は佐藤先生がご指摘の通りですので繰り返しません。以下、本日の授業に対するコメントです。

- 机を動かすタイミング

始業前に移動したため、先生に背を向けて講義を受ける学生が多かった。歌の声はやや小さくなった一因かもしれない。アイコンタクトも不可能な状態だった。背を向けて座る学生が出ないような配置が可能。

- 最初の「書簡案」「ミニミニレポート」は受講者

のフィードバックという意味で重要である。しかし、受講生の態度には退屈している様子も散見された。説明時間は短縮した方がよいかもしれない。

- デイバート経験について挙手させた後の対応
さらに、数名指名して「何の教科?」「何年生のとき?」「テーマは?」などと問いかければ、学生の関心をさらに高めることが可能かもしれない。締めくくりに「何の役に立ったと思う?」と問いかけるなら、次の「養成される能力」にスムーズにつながったであろう。
- 「養成される能力」は4項目すべてが記入されたプリントであったが、1つ以上の項目を空欄にすることによって、「書く活動」を含めることができた。学生の学習活動に幅を出すことができ、メモを取る訓練にもなる。
- 「③デイバートとは?」をどこで入れるか?
今回はデイバートを必ずしも意識する必要のないグループ活動ため、①②④⑤③の順序がベターだったかもしれない。デイバートを意識しすぎて、話し合いの最初は戸惑った学生が見られた。
- 見当はずれの点もあると思いますがご容赦ください。

■第10回授業終了後 6月23日

○授業参観者(松久)→授業実施者(植林)

- 松久です。授業、お疲れさまでした。以下、気が付いたことをアトランダムにメモしてみます。
- 早めに来た学生が資料を見ていました。そうであるなら、次週分の資料を渡しておくとも効果的かも。
- 「歌」は乗り気じゃない学生もいるみたいだけれど、授業へのスタンバイ・セレモニーとして良いと思います。
- デイバートのふりかえりで、各チームの良い点を具体的にフォローしていることで、学生の授業への気分を盛り上げる効果があったようです。
- 今日は新しいステップに入る日のようですから、仕方ないのかもしれませんが、「講義」部分が長かったかな、と思いました(居眠りしている学生がいました)。説明部分は前回に資料を渡した上で、ホーム学習の課題として、グループ活動の一環として、グループ毎に確認させる、というやり方もあるかもしれません。ただ、時間配分の問題

もあり、技術的に難しい面もあります。

- モットー作りを含め、素材が分かりやすく、学生が入りやすいテーマだと思います。企画が良いですね。
- 教材の配布にもっと多くの学生を動員してもよいのではないかと。にぎやかにやれば、2, 3の居眠りしている学生の目覚ましにもなります。
- 講義の話し方は明快で、ゼスチャーを含め表情があり、総じて学生に聴く姿勢ができています。
- デイバートですでにやっているのかも知れませんが、このテーマであるなら、一定段階までグループ作業が進展したら、グループ間で意見の交流をやっても面白いかな、と思いました。
- グループ作業中、教員への質問もけっこうあり、いい雰囲気です。
- 一部のグループでは、あまり議論に参加しない学生もいました。これは対処が難しいのですが、チーム毎にその日の盛り上げ役を決めて、ひっこみがちな人に水を向けるように仕掛けることも考えられます。ただ、学生がこちらの思惑通りに動いてくれるかわからないので難しい面があるのです。
- この授業は情意面のウエイトが小さくないと思いました。そうであるなら、学生に「討論参加度」を自己採点してもらうことで、ひっこみがちな学生にふりかえりの機会を持ってもらえるかもしれません。ただ、これは突然やると学生が当惑しますので、次の機会にでも検討材料にいただければと思います。
- どのチームの発表も堂々としていて、やるもんだな、と思いました。時間をもうすこし取れば、その場ではなく、チーム全員を前に出してやれば、一体感がもっと出るかもしれません。
- これも時間の問題がありますが、発表に対し他のチームから「ひとことコメント」を出してもらえば、より盛り上がるかもしれません。
- 総じて大変楽しく、良い授業だと思います。私も勉強になりました。
- 授業実施者(植林)→授業参観者(松久)
- 松久先生、お忙しい中ご参観くださり、ごていねいなアドバイスをいただき、どうもありがとうございました。以下、思いつくままに。
1) 資料につきましては、正直に申し上げますと、先週段階ですべてを用意することができま

せんでした。難民の子どもの声を中心とした資料は、先週に配布できたのですが、NGOの報告に関する資料配付は今日になってしまいました。やや準備不足でした。

- 2) 今日は、確かにレクチャーが長くなりました。次回以降は、授業の構成上、レクチャーはごく少なくなります。レクチャーを聞かせる動機付け、雰囲気作り、パフォーマンスにつきましては、小生にとりまだまだ難しいのですが、「細事の積み重ね」に心がけます。
- 3) 教材配布につきましては、いつもはアシスタントの学生に協力してもらっているのですが、今日は所用で不在でした。もっとも、アシスタントがいるかないかにかかわらず、受講生の動員を試みたいと思います。
- 4) 「他の班からの一言コメント」につきましては、次回に必ず試みてみます。
- 5) 「ミニミニレポート」での感想や意見も、かなり充実してきています。中には、「我が班の言いたかったことが、先生に全く伝わっておらず残念」とのべ、まとまりのある追加説明をしてくれたものもありました。率直な意見を出せる関係を大事にしたいと思います。その他、いろいろな意見等が出ましたが、「教育を受ける身でありながら、教育のあり方について考えるのが新鮮な体験だった」という感想が、今後本学のFD推進という観点からも、特に印象的でした。

■第12回授業終了後 7月7日

○授業実施者(植林)→参観者なし

- 本日の授業は、ほぼすべてを発表会準備のためのグループ作業にあてました。各班ともかなり積極的に取り組んでいました。寸劇に力を入れる班、OHCを使つての説明に力を入れる班、給食メニューに頭を悩ます班などがあり、来週と再来週の授業では、各班の特徴がよく出た発表がなされるものと、大いに期待しています。
- なお、本日の授業では、法文学研究科M1の院生に、「教科書を使わない識字教育の実例」を5分間で紹介してもらいました。本人は、当然の事ながらかなり緊張しており、ほぼ原稿の棒読みという感じでしたが、配付資料(A4判1枚)は簡潔でしっかりしておりました。私といたしまして

は、「棒読み」でも学生が眠らないという珍現象(?)に接し、やはり、授業の中でのレクチャーの位置づけを明確にし、学生に興味を持たせる内容の過不足のないレクチャーを行うことが、何よりも重要であることを認識いたしました。

■第14回授業終了後 7月20日

○授業参観者(佐藤)→授業実施者(植林)

- 授業お疲れ様でした。もうすぐ終了ですね。学生たちの表情も以前に比べて柔らかくなっている気がしました。以下気づいた点です。

〈最終課題について〉

- 今回は難民の子ども向けの教育プログラム作成ということだったが、設定に少し無理があったかもしれない。カリキュラム作成までは良いが、模擬授業の目的が不明確であった。結果として、学生は、①ウケを狙うコント、②ステレオタイプの道徳授業のどちらかを作成してしまった。代替案は2つある。
 - 1つは、授業に徹するもの。この場合、難民向けよりは、日本人の小学生向けに、開発教育の授業を20分ほどでもらう方が目的は明確になるだろう。ただし、これは教育学部の学生たちにすべき内容であり、共通教育の授業としてはレベルが高いと思われる。
 - もう1つは、授業の周辺の教育環境にとどめるもの。この場合は、例えばグループが1つのNGO団体だと仮定して、学校づくりプランの発表というシミュレーションをとる。候補地、校舎設計図、予算、スタッフ、教育目標、学校のモットー、カリキュラムを発表する。それで、愛媛県もしくは政府、スポンサー企業の前で、プレゼンを行い、自分たちのNGO団体に補助金を出してもらうよう説得するという形式をとる。実際には投票を行い、グループに評価点数として加算することも、動機を高められると思われる。
 - 他グループへのコメントが、どのように反映されるのかが不明確なため、緊張感がやや足りないコメントであった。
 - 個々の学生のコメントはしっかりしているし、やる気もあるのだが、教室全体の雰囲気がそれを反映したものとなっていなかったのは残念である。
- 〈教室環境について〉
- クーラーの作動音が意外に大きい。運転時に発言

はほとんど聞き取れない。また眠りを誘発していた。

- 暑いのを我慢させて、クーラーをオフにするか、聞き手役の学生を前方中央に集中して座らせるかのどちらかをとる必要がある。
- 授業参観者（井上）→授業実施者（植林）
- 各グループとも、程度の差はあるものの、よく考えられており、知識を実践的態度に近づけるといいう点で、授業目的が達成されていたと思います。以下、重複を避けて、気づいた点を述べさせていただきます。

- 1) 発表の2回目（前回の続き）で、授業者からは特に授業の目的や意義についての言及はなかった。聞く態度の注意、発表に対する評価の観点も含めて、これらの点を繰り返すと、授業が引き締まる。
- 2) 発表者の声は小さく、クーラーを切っても聞こえない部分があった。授業者は発表の途中でも、大きな声を出すよう指摘した方がよい。
- 3) 聴衆の参加を促す手段：①評価シートを準備して記入させる。②聴衆への発問（例：「この場合の動物は、ペットと家畜ではどちらが適切だと思いますか。また、それはなぜですか。」）
- 4) 聴衆の緊張感を高めるため、授業者は着席位置を変える。（例えば、A班の発表は前方で聞き、B班の発表は後方で聞く）これにより、室温や声量等の問題も把握できる。

○授業実施者（植林）→授業参観者（佐藤・井上）
 ごていねいなコメントをどうもありがとうございました。どれも、たいへん参考になります。発表やコメントのなかにキラリと光るものが見えつつ、それが全体的な高まりにまで、なかなかつながっていませんでした。発表やコメントのレベルは、大体、先週と同じだと思います。ミニミニレポートを見ましても、発表者側と聞き手側双方に、「満足感」と「物足りなさ」があったようです。最後に発表した班の女子学生の1人は、「心の痛みのケアを適切に考えていなかったのかなと、悲しくなった」とのコメントを出してきています。ともかく、次回の授業では、「何ができたのか」「何ができなかったのか」の両方を、各自がしっかりと心に刻んでほしいということをおもうと思っています。私自身についても、こうした点を整理して、学生の前で報告するつもりです。また、この授業を作るに当たっ

て、受講生をはじめ、多くの方々のサポートがあった点にも、言及するつもりです。

参考文献

- 1) 阿部和厚ら「北海道大学FDマニュアル」北海道大学高等教育機能開発総合センター『高等教育ジャーナル』7号（2000）
- 2) 京都大学高等教育教授システム開発センター編『開かれた大学授業をめざして～京都大学公開実験授業の一年間～』（玉川大学出版部，1997），京都大学高等教育教授システム開発センター編『大学授業のフィールドワーク～京都大学公開実験授業～』（玉川大学出版部，2001）
- 3) 「FDは大学の置かれている状況に依存している」という言説は、「各大学に置かれている高等教育関係センターの機能は大学の置かれている状況に依存している」もしくは「各大学の高等教育関係センターの教員の役割は大学の置かれている状況に依存している」という言説と平行である。センター教員は何者であるのか？ 研究者か、良き授業実践者か、それともコンサルタントか？ センター教員が自己をどう規定しているかによって、各大学のセンターの業務は異なってくるだろう。こうしたセンター教員のアイデンティティ問題とFD活動の内容の関係性については別稿で考えたい。